

実践英語教育

授業評価の検討とこれからの展望

英語教育分科会座長

都市教養学部人文・社会系教授

福間 健二

(はじめに)

わたしたちの「実践英語」も、2010年度で6年目を迎えた。

1年次の初めの「クラス編成テスト」によって、A・B・Cのレベルに分かれる能力別クラス編成がなされる。

そして、選択制を取り入れた日本人教員担当の2年次のⅡa・b以外、つまり、日本人教員の担当するⅠa・b、NSE教員の担当するⅠc・dとⅡc・dは、共通教科書を用い、統一期末試験をおこなっている。

わたしたちが学生の意欲と能力を向上させようと考えて積み重ねてきたここまでの試行と経験が、どう功を奏しているか。その一方で、学生に通じにくいのは、どういうところなのか。

2010年度前期、実践英語Ⅰaの授業評価アンケートを検討しながら、そうしたことを確認するとともに、首都大学東京での英語教育のこれからの方向性を考える目安となるものを探ってみよう。

(個別質問事項について)

問9では、共通教科書の「難易度」について、問10では、それを使った授業のなかで「いちばん関心をもって取り組むことができたものは何ですか。」と尋ねている。

これは、もちろん、次年度以降の教科書を選ぶ上での参考にするためであるが、根本的なところでは、共通教科書の採用そのものがどう受けとめられているかを知りたいという意図がある。

2010年度、実践英語Ⅰaに採用したReading Explorer 3は、初版であることもあって印刷上の不備などがあり、教員にとっては使いにくい一面があったのであるが、難易度についての学生の回答は、従来よりも「ちょうどよい」が増えており、また、共通事項の質問への回答からも、学生がこの教科書を好意的に受けとったことが想像できる。

たしかに、この教科書は、一方で問題をもちながらも、現在の世界のさまざまな問題を扱った題材の選択

とレイアウトに斬新さのあるものだった。

関心主題を尋ねる問10への回答は、「内容理解」を選んだものが圧倒的に多く、そのあとに「英文和訳」「構文理解」「語彙の学習」とつく。

2010年度にかぎったことではないが、こうした受け取り方は、英語を読んできちんと内容を理解するという授業の基本的な方向づけからすれば、妥当なものである。

問11の「学習貢献」の項目。

そこで、「この授業は、今後のあなたの英語学習に資するところがあった。」というのは、まず、現在の社会では、どんなかたちであれ、だれにとっても、英語を勉強してゆくことが必要であるという前提に立っている。とくに1年生の前期の段階で、学生が自分の英語との関わりに対して積極的な意欲をもつことの重要性は、言うまでもない。

2010年度の回答の、「強くそう思う」「そう思う」を合わせた全体の41.7%というのは、まだ高いとはいえない。しかし、これは、平均値で見ると3.28となり、2009年度の3.1からすると伸びている。2009年度とほぼ変わらない教員の見解(4.16)とのあいだの開きも狭まっている。

(共通の質問項目について)

問1 「態度」：「私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。」

平均値で、2007年(3.36)、2008年(3.41)、2009年(3.43)と横這いをつづけてきたのが、2010年度は、3.56となった。学生がこの授業に意欲的・積極的に取り組んでいたかという教員側の観察は、過去4年がいちばん高かった2009年度とほぼ同じ3.79である。学生の授業態度は向上していると見ることができるだろう。

問2 「意識」：「授業の目的を意識しながら学習することができた。」

2007年(3.24)、2008年(3.29)、2009年(3.26)であったのが、この項目でも、2010年は、3.43と伸びている。そうするように促したかどうかについての、

教員の回答（2010年は4.20）とはまだ開きがあるとしても、意識的に学習する学生は増えていると見たい。

問3 「説明」：「教員の説明はわかりやすかった。」

2007年（3.31）、2008年（3.59）、2009年（3.58）に対して、2010年は3.69。わかりやすく説明したかどうかについての、教員の回答（2010年は4.27）との差は大きい。学生に通じる説明をさらに工夫してゆく必要があるだろう。

問4 「対応」：「教員の学生の質問・意見に対して適切に対応していた。」

2007年（3.53）、2008年（3.79）、2009年（3.68）に対して、2010年は3.84。教員の回答は4.31であるが、この項目では教員の努力への評価が高くなっている。

問5 「時間」

1週間の学習時間。従来から、学生の学習時間は、一般的に考えても、教員の期待する1時間程度ということからしても、短すぎると懸念されている。この項目に関しては、2010年も、あまり大きな変化は見られない。

問6 「成績」：「成績評価方法について十分な説明があった。」

2010年度は、3.74。十分な説明をしたかということへの教員の回答は、4.34。開きはまだある。周知徹底への努力はなされてきたが、期末試験70%・平常点30%としている平常点の内容について、教員の考えが学生によく伝わっていないという問題があるかもしれない。

問7 「成果」：「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。」

2010年、学生が3.23。教員3.79。学生・教員の双方とも、他の項目に比べて、低い数値である。従来からそうであり、目標そのものを検討する必要もあると考えられる。

問8 「満足」：「私はこの授業を受講して満足した。」

2007年（3.19）、2008年（3.35）、2009年（3.3）であったのが、2010年は3.47と伸びている。問1「態度」と問2「意識」とともに、よろこぶべき数値である。とはいえ、満足したとする学生が全体の半分を少し超えているという程度である。教員の回答（2010年、3.53）からも窺えるように、もっと多くの学生が満足できるようにするにはどうしたらいいのかということ、これからさらに、さまざまな角度から考えてゆく必要がある。

（これからの展望）

今回見ることでできた2010年度1年生の回答は、こ

こまで「実践英語」をやってきたわたしたちにとって、大きな励ましとなるものである。

教科書がおもしろいものだったこともあるが、「実践英語」の5年間の経験が活きて、授業内容が充実してきた。それが、全体として、学生の授業態度、学習意欲を向上させている。そういう成果をいちおう認めていだろう。

しかし、その一方で、もちろん、まだまだ反省すべき点はある。教員の側に工夫の余地があるばかりでなく、学生も、どの分野に進むにせよ、英語学習の重要性を認識して、さらに真摯に授業に向かってほしい。

現在、わたしたちは、「実践英語」の授業内容、共通教科書、統一試験などについての見直しを始めようとしている。

自分の思っていることを英語で言い、英語で書く。さらには、自分の必要とする英語の情報を、英語を使って求め、正確に理解する。そして、国際的な視野と自分の意見をもって英語に親しみ、積極的に、怯むことなく英語に向かってゆく。

そういう学生がひとりでも増えてゆくことを願いながら、改善すべきことは改善し、さらに努力を積み重ねてゆきたい。